

発展途上国を支援している人から直接生の声を聴けたのは今回が二度目で、やはり現地を経験した人の話はとてもタメになるなと感じました。なぜミャンマーで支援しているのか、なぜバアン技術訓練学校をやろうと思ったのか、当たり前ですがそこには現地の人々や政府と深く話し合った結論があるというのを聞いて、きっとそこに至るまでの時間も長く大変だったんだろうなというのがすごく伝わってきました。また技術だけを教えるのではなく、現地の人々により良い教育の機会を設けていて、卒業後も卒業生がどれだけ仕事を続けられているか本当に最後まで面倒を見ているという話を聞いて、私も日本の児童養護施設の子供たちを支援する中で、社会にでてからのその子供たちがどうなっているのかを施設側がしっかり把握しているのか、そうでなければ私たちができることは何なのかをたくさん話し合ったことを思い出しました。やはり一言支援するといっても方法によってはどこまで責任をもって面倒を見てあげるべきなのか、気にしすぎても本人の自立を妨げてしまっは意味がないので、私たち学生団体ができる範囲がどこまでなのか、最大限にできることは何かを改めて考えるきっかけになりました。言葉も風習も価値基準も異なる中で大切なことは現地の人々を思いやる気持ちはもちろん、ある意味こちらが楽しさを見出すことも重要なのではないかと、講演を通して感じました。森さんの話しているときの生き生きとした雰囲気が、本当にミャンマーが好きなんだなと感じたし、活動自体に価値を見出し楽しさを感じているからこそ続けられていることだと思うので、私にとってもこれからの活動の原動力になりました。

私は森さんの講演で「後戻り感」という言葉が印象残った。どこかで国際協力は頑張れば頑張るほど成果が出ると思っていた。その考えは甘かった。森さんらが運営している学校は外国の技術・教育を取り入れているものの、あくまでもミャンマーの学校で、ミャンマーという国の理解と環境がないと進めたいものも進められないということがわかった。

もっと詳しく知りたいと思った点は、世界各国の様々な団体がミャンマーで学校を運営するにあたってルールや基準はどのようになっているのか、ということである。例えば、今回知ったバアン技術訓練学校は日本の技術が勉強出来る学校だが、似たような工業系訓練学校をアメリカの団体が作った場合、教える内容が異なるのではないかと気になった。公立学校に行かないで僧院学校に行っている人もいるということは、人によって勉強している内容が日本などに比べるとばらついているのでは、と思った。

また、ミャンマーという国の事情に興味を持った。世界史で大きな出来事を習っただけなので、今回の講演で私が思っている以上に外国の影響を受けてきたのだろうと感じた。

森さんの活動は、住民参加型を心がけていたり、ミャンマーに戻りたい人が帰れる環境作りを精力的に取り組んだりと常にミャンマーの人々と同じ目線に立って活動されていること

に感心したのと同時に、政変などによって積み重ねてきたものが一瞬にして壊れてしまう国際協力活動の難しさやもどかしさを感じた。軍事政権を作りたい軍とそれに反発する市民が対立し、市民の本当に望む支援は環境の変化によって変わってしまう。また、情勢による市民の支援を後回しにして今まで通りの計画を続けると外部からの支援が難しくなり支援対象者との溝が広がってしまう。情勢の深刻化が支援を阻むミャンマーで、政府寄りでも武力勢力側でもない中立的な立場として働く森さんの「違うを超える」という言葉は、とても重く様々な思いが込められているように感じた。小さなことから始めることができるボランティアや支援活動は、時には周囲によってその道が閉ざされてしまうという二面性を持つのだと今回の講義を通して感じた。

サステナブリッジの HP で見た”違う”を超えるという言葉に込められた意味がとても印象に残りました。

というのも、この理念が学校の行く人たちの今後の考え方を形成するのに大きな影響を与えていくと思ったからです。

森さんは「どこに行っても”違う”は交わらないとされてしまう」とおっしゃっていました。確かに過去の歴史を振り返ると、民族差別や人種差別、宗教差別などがたくさん起こっており、コミュニティに属するマイノリティーは排除されてきた例は多いと思いました。現在は特にマイノリティー問題が重要視され、多文化共生社会などといわれていますが、それでも先進国でさえ問題が起きている状況だと思います。私はこの問題を少しでも解決できるようにするには自分の育った環境や周囲の状況が大事だと思います。同じ宗教や民族を一つの枠組みとして固めるのではなく、差別化を図らないで一緒のコミュニティで過ごす”違う”というのが当たり前になると思います。そうすれば、自分達と違うから敵、交わらない、劣っているなどといった考え方をもつ可能性は低くなるんじゃないかなと思いました。なので、森さんが理念として掲げていた”違う”を超えるというのは生徒たちにとってとてもいいことだと思います。

貴重なお話を聞くことができ本当に良かったです。ミャンマーと日本の接点もたくさん知ることができました。お忙しい中お時間を割いていただきありがとうございます。

サステナブリッジの活動がとても地域密着型で現地の方々のことをまず第一に考えていらっしゃる事が印象的でした。国際協力・ボランティア論の中で、本当の意味での支援とは何かということについて考えたことがありました。発展国に住んでいる私たちは支援物資だけを渡すだけで支援した気になってしまったり、私たちの固定概念をそのまま押しつけたような支援の方法が行われてしまっていることが多いと思います。これは想像力の欠如であると考えられますが、実際に発展途上国に行ってみないと分からないことも沢山あ

と思います。ここまでは考えられても、どのような支援が1番良いのか答えを出せずにいました。しかし、森さんのお話を聞いて、ミャンマーでは今どのようなことが問題になっているのかを明確にした上で、その国の人たちの文化や考え方を踏みにじることなく第一に優先していること分かり、これが本当の意味での支援であると私は感じました。講義の前半にミャンマーの暮らしや文化などを詳しく知れた上で、どのような活動をされているのかを知れたため、支援において相手の国の文化を理解することの大切さが分かりとてもためになりました。

私が公演を聞いて興味深いと思った点は2点あって、1つめは森さんが課題だと仰っていたミャンマーでの「普通」を変えることについてで、2つめは途上国におけるサステナブリッジさんのようなNGO団体と現地の政府の関係です。前者では、ミャンマーでの人々の労働環境や衛生観念や安全に対する「普通」が日本とは全く違うことを資料の実際の写真をみて、お話を聞いて実感しました。これまで浸透していた考え方や習慣を変えるということは一朝一夕ではいかないことだと思います。サステナブリッジさんの活動報告や森さんのお話を聞いてミャンマーを良くしようと少しずつ根気強く努力されていることが伝わりました。「普通」や「当たり前」を変えることこそHPにもあった『「違う」を越える』ことなのだと感じました。後者については、ミャンマー政府の方針が活動に大きな影響を与えていることがわかりました。ジェンダーやマイノリティに関して、NGO団体側が平等のために動こうとしても受け入れてもらえないなど、「やりたいこと」がなんでも「できる」わけではない葛藤が感じられました。近年のコロナ禍や政変で辛かったりやるせない気持ちになることもあると思いますが、活動を続けていただきたいです。応援しています。

森さんのお話はどれも大変興味深かったが、とりわけ印象深かったのは、ミャンマーの交通の便と、宗教的・道徳的・民族的価値観についてであった。

まず、交通の便に関して、2008年にミャンマーに甚大な被害をもたらした大型サイクロン「ナルギス」の際には、あまりに景色が変わってしまったことによって、現地の人でさえ道が分からなくなり、ボートの上で立ち往生していたというお話があった。飛行機や電車や新幹線、バスなどが無ければ、これほど人やモノの行き来を困難にするものなのか、と私にとって衝撃的であった。国内の交通の整備が行き渡っていないことは、日本とミャンマーでの「常識」や「当たり前なもの」が根本から異なっていることのひとつであり、色々なレベルでの違いがこのほかにもたくさんあるのだろうと窺い知ることができた。公共交通機関の重要性を強く感じた。

次に、ミャンマーの宗教的・道徳的価値観に関しては、女性への支援についての質問に対して、学校の寮にて男女が同じ部屋で近くに居続けることに政府が難色を示したというお話

があった。また、ミャンマーにはおよそ7割を占めるビルマ族以外に、政府が認めているだけでも135の少数民族がいることから、学校ではそれまでそれぞれ違う言語を話していた生徒たちが、言語の違いによって勉強に困難を感じることも少なくないというお話もあった。こうした、民族や宗教、道徳、言語による違いは、日本とミャンマー間だけでなく、ミャンマー国内にも数多くあり、それを否定するのではなく認め合う形で乗り越えることこそが、相互理解および国際協力をする上で重要な基盤になるものであるのではないかと思った。

森晶子さんの活動紹介を聞いてまず、「違う」を乗り越えるという考え方、そして自分の中にある社会に対しての疑問をそのままにせず、行動に移したその勇氣ある姿勢に感銘を受けた。

私も日々生きていく中で「違う」を発見することがよくあるし、社会へ疑問を抱くときがある。まだ私は「違う」に触れると少し違和感を感じてしまう時があるが、森さんの考え方を聞いて素晴らしいと思ったし、これからの社会に欠かせない考え方になっていくのではないかと考えた。また、疑問に思ったことに対して何らかのアクションを起こすことは簡単なことではないが、それを通して自身を成長させられると思うので、受動的ではなく能動的に行動に移していこうと思った。

また、ミャンマーについて知っていることが少なかったのが面白い、あるいは興味深いと感じたことはたくさんあった。特に少数民族が多く存在すること、それによって紛争が起りやすいこと、黒魔術・聖霊信仰・仏教などの宗教が強く生活に影響していること、この3つが大変興味深いのもっと調べてみようと思った。

森さんが、ベクトルを日本や海外に向けているのではないかと仰っていたところに興味を持ちました。訓練学校で一般教養から専門的な技術を学んだ学生達は様々な企業に就職していくがその中で地元には必要でまだ無かった技術を得て企業をし、自分の村のために仕事をする。その積み重ねが実際に国をより豊かにしていくまでの一番大切な道のりなんだろうと私は感じました。たくさん海外企業がミャンマーに進出してその企業に就く事で実際にお金を稼ぐことは可能だし所得も増え経済が回るようになる。しかし、それだけで国が豊かになるわけではないし村のニーズに合った会社があることがその村のためになると思う。

また、たくさん民族があるミャンマーの中で行う訓練学校には一つの民族だけではなくたくさん民族や地域からくる生徒を受け入れて生徒達の中での「違い」をお互いに受け入れていくというのは、どれだけ勉強ができるのか、どれだけ技術力があるのかよりも大切なことであると感じた。世界中に違いを受け入れようとしない考え方が存在しているのは事

実だし、言語や習慣、考え方が違うとお互いを受け入れることはそう簡単ではないがお互いの違いを受け入れながら、精神面、技術面で成長することができる環境を整えているサステナブリッジさんの活動により興味を持ちました。

森さんが、今までの功績だけでなく、今後の課題や問題点を具体的に話してくださったことが印象的だった。森さんが、現状に満足せず、より進歩できるように活動していることがわかり、非常に感銘を受けた。成長し続けようとする大人って素敵だな、と憧れた。

学校で、巡回などで訓練生へ声がけを行い、コミュニケーションを大切にしていると仰っていた。人と人のつながりを忘れないところが、ここまでプロジェクトが発展している原因であることが推察できる。開発途上国に、技術を押し売りするのではなく、教育などで人のつながりを大切に、一緒に活動しようとする姿勢が必要だと知ることができた。

日本では、女性と男性で仕事を分けることは、ジェンダー差別だとされる。しかし、ミャンマーでは、政府から女性と男性で明確に仕事を分けられている状況だと知った。女性は家事に結びつく仕事、と限定されなくて、男性と同じような職業に就くことが男女平等であり、大切だと思ってきた。しかし、国の発展と男女格差を両立して解決することは、非常に難しいと思った。今回の講演がきっかけで、開発途上国の男女格差について詳しく学んでみたいと考えた。

今回私は事前に考えた質問で、『ドロップアウトした生徒の退学理由』というものをグループであげたのだが、大体が家庭の事情や本人の健康上の理由などだと思っていた。だが実際には言語の壁という、同じ国に住んでいるのにも関わらず多民族国家であることで起こる弊害が大きいことを知って驚いた。途中で中学や高校を退学してしまった子たちを多くとるようにしているとのことだったが、多民族国家であることと途中で学校での学習をやめてしまうと子どものころに身につく言語の学習がままならなくなってしまうことの二つが重なって職業訓練にまで影響が及ぶのは一つの問題点だなと感じた。また、職業訓練学校を出た後に地元に戻って自分でサービス業を始める卒業生も何人かいるとのことだったが、そうやって自分で事業を始める力があるひとたちが高等な教育を受けられないで地元だけでおさまってしまうのはとてももったいないことだと思う。

グループごとの質問の際に出た、支援の際に女性にしている支援として、どんなものがあるのかという質問で、ミャンマーには、まだ男女同じ学校で同じものを学ばせるのが認められていないという現実に関心を持った。現在、男女差別が大きく世界中で取り上げられているが、いまだに国として男性は力仕事や技術系、女性は裁縫や家事系などと分けられている

ところがある事実を知った。そこで、森さんたちは、無理に国の方針を否定するわけではなく、宿舎などの話で、これなら可能なのではないかという提案を出し、女性の希望者も男性と同じ学校で学ばせるようにしている、ということに、森さんたちが守っている中立的な立場、というやり方を感じることができた。男性が多い学校で、森さんたち女性スタッフが、女性生徒の配慮をし、なるべく格差を感じさせないように学びの場を提供していることに感心した。少数の立場にいる人々にも寄り添い、できるだけ格差を感じさせないようにすることもボランティアの一環であることに気づかされ、考えさせられた。

政治や宗教には触れないようにしたり、結果的には上手くいかなかったけれど女性や障害者の支援もしようとしたり、ドロップアウトを減らそうと相談に乗ったり話し相手になったり言語や民族関係なしなどいろいろな人のために沢山考えて行動しているのが分かりました。ミャンマーの人たちが安心して暮らせるようにしたいという森さんの気持ちがとても伝わってきましたが、何かしたいと思って「教育」という支援にたどり着きそこから学校や、選抜の仕組みなどを作り成功させていることが自分にはない行動力でとても刺激を受けました。これからも劣悪な環境やコロナなど悩まされることがたくさんあるかもしれないけれど頑張っただけで欲しいと思いました。

今回森さんのお話を聞いて、国際支援は想像以上に難しい点が多いことを知りました。学生から中立的な立場として意識していることについて質問があったのですが、私が支援する立場だったら確かに難しいと感じました。過激派のグループと民主主義を掲げているグループがあったとしたら前者を差別的に、批判的に見てしまうと思います。それでも支援するという立場から誰にも均一に接するためにあまり政治的な色を出さないようにしたり深入りしないという意識をしているそうです。NGOがやるべきことは政府ができないことである、というようにみんな平等に、民族や宗教の「違いを超えて」支援する考え方も素晴らしいなと思いました。どんな派閥、宗派、種族の人でも生きていくためにお金は必要で、サステナブリッジはまさに自分で稼いで幸せに暮らせるようになることに焦点を当てていて将来性のある活動は支援していく上で一番大切なことなのかもしれないと感じました。

他に難しいと感じた点は、女性の支援についてです。SDGsの考え方が広がっていますが、先進国だけに広がればそれで良いという話ではなくて途上国も関係なく広がる必要があります。先進国さえも変えられていない女性への考え方を途上国の国々の方が広まっていたら将来いつ逆転されるかわからないと思います。急に変えることは難しいかもしれませんが、発展途中で考え方も変えるように意識すれば効率が良いので、そのような国は珍しいので同時にどんな国になるのか気になります。初めて私もいつか海外でボランティアをしてみたいと思ったお話でした。ありがとうございました。

今回の講義では日本という国がいかにか恵まれているのかそれにプラスして生きづらい国にもなってしまうのではないかと思いました。日本は宗教というくくりがあまりないように感じます。それによって女子や男子の日常生活の格差は国からあまり求められるようには感じません。その中でもこの活動は職員の方も様々な方がいらしたりとその宗教というくくりの中でいかに交流をしていくかが考えられている点にすごさを感じました。決まりという中でギリギリを攻める、女子のホームステイのような形やそういった工夫は世界でいま女子と男子の違いといったことが問題視されているなかでそれを縮めていく一歩としてその行動は第一歩ともいえると思いました。また日本は初心忘れるべからずといった言葉がありますが、国全体として戦争などの世界的に大きな衝撃をもたらした経験は振り返ることのある出来事ですが貧しかった出来事はできるだけ思い出す事をさけ、お金を得てできるだけ楽にというのを考えていると思います。私はミャンマーの人たちはIT技術の発展は乏しくともEコマーズのネットは成功せずとも買いに来てくださる方がいたり新しい人の手から生み出される技術を大切にしているように感じます。そういった点に素晴らしさを感じました。森さん、講義ありがとうございました。

本講義において「サステナブリッチ活動の最終ゴールは、将来的に日本のNGOから自立して彼らだけでやっていける様にするることである。」「こういう未来があるということを見せる。」というメッセージが非常に印象的であった。私は国際協力を学び考える身として、果たしてこれまで国際協力の先にある未来を想定してこれただろうかという疑念を抱いた。国際協力を携わる政府、団体は国際協力をしているという事実に対して自己満足をして、そこで終わらせてしまっていないだろうか。国際協力という行為そのもの自体に満足と充実感を抱いているのであれば、それは非常に愚かな考えだ。そして自身の優越感、利益を満たすことを目的にした国際協力は紛れも無い偽善だ。継続的な国際協力をとよく言うものだが、国際協力の先に自立が無ければ本当の意味で助けを享受する側の人の為になっていると断言することは難しいのではないかと考えた。意図したものであれ、不本意であれ、国際協力の結果として国際協力を依存する国家の形成へと導いてしまうのは望ましくない。しかしそれは国際協力を携わる誰しもが安易に陥り易い国際協力の一種の特徴ともいえるかもしれない。重要なのは、この様な危うさを持つ行為だということを理解し自覚して、常に注意を払いながら国際協力の本質と意義を見失わないように常に初心の姿勢で向き合っていくことだと再確認するに至った。政変の影響を受けながらも絶うことを知らない森晶子さんの情熱に感銘を受け、私も学び知ろうとする熱意と行動する勇気を絶やすことなく一生涯自分の人生と向き合い続けていこうと強く感じた。

私が想像していた以上に、現地の人の生活に寄り添った活動をしているのだと知り、とても驚きました。特に年の近い職員がケアしに来てくれたり、不満があるか聞きに来てくれるのは良いなと思いました。自分から言いに行くのはやはり難しく、それを話しやすい環境になっているのはすごくいいことだなと思いました。

それから、技術支援のレベルがとても高いことに驚きました。日本とほぼ同等の技術を学ぶことができる機会があるのはすごいなと思いました。

ただ、女性への支援があまりうまくいっていないことが少し残念に思いました。

宗教や、染みついている考え方がある中で新しい考え方であることをひろめていくのは大変なことなのだなと感じました。女性も進んで技術を身に付けられるようになったらいいなと思いました。また、そのようになったときに女性が学びやすい環境がしっかり作られていたらいいなと感じました。

環境や、コロナウイルス、考え方等障害となるものは多いとは思いますが、頑張っしてほしいなと思いました。

私はミャンマーの宗教観や少数民族について関心を持った。仏教国であることはなんとなく知っていたが、仏教の精神に基づき、公教育以外でも勉強の場が提供され、高い識字率を誇ることは全く想像もしていないことだった。ほぼ単民族国家である日本に住んでいると、価値観の違いを感じることはあっても宗教や民族の違いを感じる場面は非常に少ない。またミャンマーで多数派を占めるビルマ族の人々にとっても、多様な民族の受け入れを行っているパアン技術訓練学校での生活は刺激的なものだろう。

さらに技術訓練を受けた後、就職する人だけでなく起業する人もいるということに注目した。教育の機会に恵まれなかった人々が学校で学ぶことで、好奇心が刺激され様々な夢を持つことは素晴らしいことだと感じたし、これこそ「国際協力」であるのだろう。同世代のものとして刺激も受けた。

「違う」をこえるの「違う」には「宗教」「言語」「価値観」「民族」などの意味が込められているようだ。様々な国の人と交流したいという気持ちがより強くなった。

サステナブリッジの活動内容だけでなく、ミャンマーについても知ることができて良かった。今まではほとんど考えたことがなかったが、ミャンマーには長い歴史とたくさんの魅力があると分かった。現在も政変や風土病の流行など、問題点も残されているというのも伝わってきた。戦後に日本が食糧難に陥ったときに米を支援してくれたというのを聞いて、今度は私たちが手を差し伸べるときだと強く感じた。またミャンマーの教育制度に関心を持った。成績が上位の者が難関とされる学部に行くことができるというの自体は筋が通っている

るが、生徒側のやる気を考えると、日本のようにある程度は自分の行きたい学部を選んで進学の方が学ぶ側も長く続けられるのではないかと思った。難関な学部で勉強する内容は特に社会で重要な役割を担っていることが多いので、中途退学者が増えてしまうと、国の経済や国民の健康が危ぶまれてしまうので深刻な問題だと思った。ミャンマーがまた世界寄付指数で首位を取る日が来れば良いなと願った。

ミャンマーの義務教育の年数は12年間で、日本と同じだけれど、各学年終了後に試験があるのが印象的でした。日本では学年が終了後に上の学年に上がるためのテストはないし、不登校で出席日数が足りていない子でも上の学年に上がれるのでミャンマーは厳しいなと思いました。また、頭が良い人は自動的に医者とかになるために大学の医学部に入れられることも驚きました。また、パアン技術訓練学校の土曜授業として行っている取り組みも印象的でした。毎月2回土曜日に英会話や薬物の危険性を政府の方に話してもらったり、手話について教えてもらったりと、私たちの学校でいう道徳の授業や総合の授業みたいなものなんだなと感じました。幅広いことを学ぶことで何か起きた時にすぐ対応できる対応力や判断力を身に付けることができると思うのでとても良い取り組みだと思いました。

今のミャンマーでは、女性もお裁縫や編み物の訓練ができる場所があるけれど、どちらかと言うと男性への支援の方に力を入れていることを知り、今後は女性への支援も男性と同じぐらい力を入れて行って欲しいなとおもいました。

まず今回の講義によって思い知らされたのは、自分がいかに日本と東南アジアとの関係を知らずに今まで生きてきたのかということです。ミャンマーの基本情報の時点で知らないことがたくさんあり、特にインパール作戦がミャンマーで行われたということを知らなかった自分を恥じました。インパール作戦の内容自体は知っていてもそれがどこの国で行われたのか知ろうとしていませんでした。近代史の勉強、特に現代と密接に関わっている第二次世界大戦について学び直さなければならないと強く感じました。

サステナブリッジについてのお話を聞いて驚いたのは、代表の森さん以外の方は本当に全員ミャンマー人であるということです。ミャンマー主体の団体だからこそできることが非常に多いのではないかと思いました。また、全ての質問にわかりやすく誠実に答えてくださって、もっとこの団体のことを知りたくなりました。生徒さんの将来についてよく考えているなと感動しました。ミャンマーは再び政情不安で大変だとは思いますが、この団体の行く末を注視したいと思います。

以上